

# 「海苔の食文化」歴史探る

かつて海苔の養殖が盛んだった大田区。同区に住む石田晃浩さん(38)は、江戸時代以降の海苔の包み紙、広告などを千点以上集めて、海苔が、いつごろから人々の食生活に登場し、広まってきたかを研究している。現在の研究テーマの一つが、「おにぎりに海苔がまかれるようになった時期の特定」だ。

(越守丈太郎)



石田さんが海苔について調べ始めたのは中学二年生の時。地元博物館の展示が海苔の製造道具ばかりで、「消費者側の生活に密着した物が無い」と気付いたのがきっかけだった。

以来、古書店で探したり、友人知人や関係団体に提供をお願いしたりして、海苔に関する絵や書籍、ポスター、さらに市販の海苔が入っていた箱

## 包装紙や広告など1000点以上収集

### 大田区の石田さん

や缶も集めた。コレクションの一つ、大手百貨店のマークが入った古い包装紙は、大正末期から昭和初期にかけて売られていた海苔巻き用海苔の包装紙。「この時期に、一般家庭で海苔巻きが普及していたと類推できます」と石田さんは言う。

最近では、江戸時代の「大森海苔」養殖の様子を描いた掛け軸を、銀座の古書市で入手。コレクショ



①江戸から明治、大正期に使われていた市販の海苔の包装紙類 ②雪目(ゆきめ)の掛け軸を手にする石田さん(いずれも大田区内で)

ンをさらに充実させた。江戸時代の絵師、長谷川雪目が幕末ごろ描いたと伝えられる「江戸名所図会」を元にした掛け軸。江戸名所図会は一八三四―三六年に刊行され、江戸中心部や近郊の暮らしや名所旧跡を紹介した書物。

「ごみを除いて刻んだ海苔を「あひる漬け」という紙すきに似た方法で四角に広げる過程や、海苔を乾かして売る人々の姿が描かれ、当時の「大森海苔」づくりの一連の作業がうかがえる。

大学では新聞奨学生をしながら博物館学を学んだ石田さんは、現在は郷

土史愛好家らによる考古学研究サークルに所属。仲間と情報交換しながら海苔の史料を集め、論文にまとめている。コレクションの一部は、同区立郷土博物館と千葉県浦安市立郷土博物館に寄託、寄贈している。

石田さんは研究を続けながら、こんな夢を描いている。「消費者も楽しんで、海苔産業の関係者にも役立つような、海苔の歴史に関する文庫を、いつか設立したい」